

黒木西

黒木西小

学校だより

文責:校長 齋藤英義

令和4年2月21日(月)

NO.22



先日、Aさんを含む4人の子どもたちが校長室を訪問してくれましたので、オセロに付き合ってもらいました。1対4で行ったのですが、私が勝ってしまいました。大人げなかったと反省しつつも「相手になってあげるから、リベンジいつでもいいですよ。」と言って、4人を見送りしました。

翌朝、昇降口のところで登校指導している私のもとへAさんがつかつかと歩いて来て「おはようございます。校長先生、勝負しましよ！」とのこと。「何?」と尋ねると「オセロです!」との返事。「オセロで?」と尋ねると「自信ありそうやね。どうしたの?」と尋ねると、「お姉ちゃんと練習してきました。作戦も考えました。」とのこと。寒い朝でしたが、一戦交えながら何となく心が温かくなりました。

今回は、気になる勝負の行方はともかく、以前からオセロを通して考えていたことをお話します。

オセロゲームのよい点は、何と言ってもルールが簡単だという事です。それでいて奥が深いのも魅力で、「覚えるのに一分、極めるのに一生」と言われています。

オセロは、少しでも心得があると違いますね。オセロの強い・弱い、ちよつと見ていけばすぐわかります。初心者は、最初にかくさんの石を取ります。一手で相手の石を10こくらいひっくり返して、自分の石がどんどん増えるのにならしてこいています。

一方、強い人は、初め自分の石を増やすことに意識を向けません。それは二の次であり、まず要所を押さえることに専念します。

例えば、四隅を取るの常識です。それ以外にもいろいろあって、後で自分が打てる場所を増やすために、外側でなく内側の石を取る。「中割り」という戦術も効果的です。

オセロでは、要所を押さえておけば後でいくくらでも逆転できます。要所を押さえることなく、自分の石を増やすことにかまけていると、後であつという間に逆転されてしまいます。

「これは人生や子育て・教育に通じるところがあるな」と思いました。人生や子育て・教育でも、大切なのは**要所を押さえる**ことです。

例えば、子ども自身が、「自分はやれる」「私ってけっこういいかも」「ぼくってなかなかやるじゃん」と思えるようにしてあげることが、一番大切なことです。



要所を押さえる

つまり、**自己肯定感**を高めるといふことで

同時に、「自分は親に大切にされている。親に愛されている」「親は信頼できる」「人は信頼できる」と思えるようにしてあげることがも本当に大切です。

こちらは、親をはじめとする他者一般に対する**信頼感**、要するに**他者信頼感**を育てるといふことです。

この二つが人間の土台であり**一番の要所**ではないかと考えています。

自己肯定感がある子は、尻上がり能力を高めたいけます。今はそれほどなくても、必ず大きな花を咲かせるようになる事が多いもの。

他者信頼感がある子は、よい人間関係を育てていくことができます。今は挨拶ができなかったり社会的でなかったりしても、心配ありません。少しずつ人間関係のスキルも学び、ゆくゆくは、よい人間関係をつくれるようになるはずですよ。

勉強やしつけも当然大切なことではありますが、この二つよりもっと根本的に大切なことではないかと思えます。

ところが、テストの点数のような表面的なもの(だけ)を優先するあまり、一番の要所を台なしにしている大人たちもいるのではないのでしょうか。テストの点や成績を上げるという

目先のことにかまけて、結果だけで子どもを叱っている親。

挨拶ができないからと言って子どもを叱りつける親。

片づけができない、だらしない、やるべきことができない、言われたことができない、などと小言を言い続ける親。

子どもたちは、「また〇〇してない!」「〇〇しなきゃだめでしょ!」何度言ったらできるの!と否定的に叱られ続け、その揚げ句に自己否定感にとらわれます。

同時に、親への愛情不足感と不信感、さらには他者一般に対する不信感を持つようになります。自己肯定感と他者信頼感が台なしになってしまつと、長い人生でだんだん失速していきまふ。

親が世話を焼いている間はよいかも知れませんが、その後が問題です。一体、いつまで親が世話を焼いていられるでしょうか? やがては、その子自身の力で人生を展開していくことになるのです。



オセロを通して、

「そのとき本当に大切なのは何なのか、よく考えて**要所**を押さえていく事が大切ではないか」

と、あらためて考えてしまいました。

